

校内研究活性化 プロジェクト研究通信



暑さが厳しい時期となりました。研究委員の皆様におかれましては、先日の第3回プロジェクト研究会に御参加いただきありがとうございました。各実践校の先生方の授業改善を校内研究の取組でどのように支えていくのか、実情を踏まえながら真剣に協議していただきました。各校の校内研究を基に意見交流することを通して、研究委員の皆様の自校の校内研究に生かしていこうとする熱意を感じました。その姿を見ていると、きっと「新たな教師の学びの姿」の実現に向かって各実践校の校内研究が活性化していくと確信しました。

さて、今年度の記念すべき第1号「校内研究活性化プロジェクト研究通信」(以下、プロ研通信という。)では、今年度の本研究の概要と第1回、第2回の研究会での学びについてお伝えします。

令和6年度
校内研究活性化プロジェクト研究 研究主題

「新たな教師の学びの姿」の実現に向かう、小・中学校における校内研究Ⅱ —児童生徒の学びの姿を見取ることを通した教員一人一人の探究的な学び—

「新たな教師の学びの姿」

令和4年12月に中央教育審議会から出された答申(以下、令和4年答申という。)にて、「新たな教師の学びの姿」として下記の四つが示されました。教員一人一人が校内研究を通してそれぞれの学びを進め、「新たな教師の学びの姿」の実現をすることが、ひいては児童生徒の学びの転換へとつながります。

新たな領域の専門性を身に付けるなど強みを伸ばすための、一人一人の教師の個性に即した

「個別最適な学び」

本研究では、教員一人一人が自校の研究主題の達成に向けて、自分の強みや個性を生かして学ぶことと捉えます。

他者との対話や振り返りの機会を確保した

「協働的な学び」

本研究では、様々な機会での他者との対話や振り返りを通じて、授業に対する考え方を広げ、深めることで、新たな問いを立てるヒントを得ることと捉えます。

変化を前向きに受け止め、探究心を持ちつつ自律的に学ぶという

「主体的な姿勢」

本研究では、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させながら教員一人一人が問いを立て、問いの解決に向けた手立てを探り続け、自分の授業に対する考え方を広げ、深めている姿と捉えます。

求められる知識技能が変わっていくことを意識した

「継続的な学び」

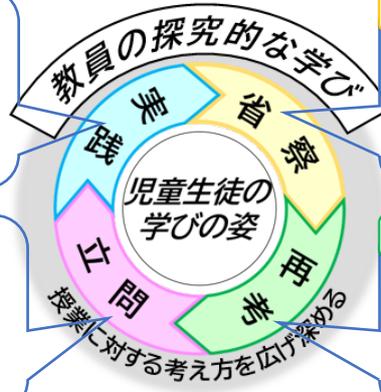
本研究では、問いの解決に向けた手立ての有効性を、児童生徒の学びの姿から検証し、新たな問いを立て、次の授業実勢に向かうことと捉えます。

教員の探究的な学び

令和4年答申には、「教師自らが問いを立て、実践を積み重ね、振り返り、次につなげていく探究的な学びを、研修実施者及び教師自らがデザインしていくことが必要になる」と述べられています。本研究では教員の探究的な学びを下図のように四つのプロセスで捉え、校内研究の取組によってその学びを支えていきたいと考えています。以下にそれぞれのプロセスについて示します。

実践 授業者が、指導案検討会や書籍等からの学び、研修等で学んだことを基に問いの解決に向けた手立ての検討を行い、授業実践を行う。

立問 自校における「校内研究プランシート」を基に、教員一人一人が自分の強みや課題、自校の現状や課題を把握し、研究主題の達成に向けた問いを立てる。



省察 実践後の研究会等で、授業者が他の教員と児童生徒の学びの姿の見取りを共有し、成果と課題を検証する。

再考 授業者が、省察した実践の成果と課題を基に、自分の問いを再考し、新たな問いにつなげる。

第1回研究会 概要

第1回研究会は、4月30日に校内研究主任パワーアップ研修[小学校・中学校] [第1回]に参加するという形で行いました。校務の関係で研究委員の先生の参加は5名中2名となりましたが、今年度の校内研究の活性化に向けて学びの多い時間となりました。

「校内研究主任パワーアップ研修」とは

研修のめあて

校内研究主任としての職務および校内研究を組織的に推進するための明確なビジョンと手法を学ぶ。

対象

- ・令和6年度に初めて校内研究主任を担当する小学校教員・中学校教員(悉皆)
- ・小学校・中学校の校内研究主任のうち、特に受講を希望する教員(希望)

第1回研究会の流れ

- 自校における校内研究の方向性(演習・協議)
—強み・弱みの分析を通して—
- 令和5年度センター研究員研究(発表)
【校内研究活性化プロジェクト研究】
- 1年間の校内研究のビジョンをもつために(演習・協議)
「校内研究プランシート」の作成と交流を通して
- 効果的な校内研究を進めるための校内研究主任の役割(講義)

第1回は「つかむ」と題して、自校の現状や昨年度の校内研究に関する研究内容、1年間の研究の見通し、校内研究主任の役割など、様々な角度から自校の校内研究を効果的に進めるためのヒントをつかんでいただきました。



自校のSWOT分析を行う研究委員



校内研究主任パワーアップ研修の様子

第2回研究会 概要

第2回研究会は、5月14日に行い、初めて研究委員5名とトータルアドバイザー、専門委員そして本研究に関わるセンター所員が顔合わせできた会でした。そして、本研究の概要をつかんでいただく重要な会でもありました。

第2回研究会の流れ

- 令和6年度校内研究活性化プロジェクト研究について
(研究概要説明)
- 自校における校内研究について(演習・協議①)
- 「児童生徒の学びの姿」を見取ることについて(演習・協議②)
- トータルアドバイザー・専門委員より(指導助言)



演習・協議①の様子

校内研究活性化に向けて

「校内研究活性化ロードマップ」を活用して校内研究を推進

校内研究主任としての学びの過程を可視化し、PDCAサイクルを確実に回し、各実践校で教員一人一人の探究的な学びを率先して実行できるようにすることを目的としました。自校の先生方にどのように学んでほしいのかをイメージし、本シートを記入しました。そして、その内容を研究委員同士で交流しました。

本研究では、実践校の先生方一人一人に「校内研究活性化ロードマップ」と同じ形式の「授業改善ロードマップ」を活用して、探究的な学びを進めていただきたいと思います。

研究委員の記入した「校内研究活性化ロードマップ」

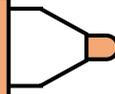
「子どもの学びの姿」見取りシートを活用した授業参観・研究協議

本研究では副題で示している通り、**児童生徒の学びの姿を見取ることを通して**、教員一人一人の探究的な学びを進めていきます。**授業において、児童生徒の学びの姿を根拠に、校内研究主題を基に考えた授業者の問いに対する手立てについて、その有効性を検証することが重要だと考えます。**そこで、授業研究会では、研究グループで見取った児童生徒の学びの姿を共有し、校内研究主題に沿った授業になっていたか、児童生徒が主体となる授業になっていたか等について、成果と課題を協議します。

現在、『子どもの学びの姿』見取りシートを自校の実態に合わせて改良・改編し、研究授業の際に活用していただいている実践校もあります。例えば、授業の流れや予想される児童生徒の学びの姿、指導の手立てをあらかじめ記入しておき、授業参観では、実際の児童生徒の学びの様子を記入するだけにしていくといった使い方です。

ぜひ、自校の校内研究に合わせて、よりよく活用できるようにしていただけたらと思います。

『子どもの学びの姿』見取りシート



齋藤先生がこれまでに赴任された3校の校内研究の取組について紹介していただきながら、御指導くださいました。

◇W小学校の校内研究の取組から 「深掘り」の時間

授業公開の後の研究会で出てきた話題の中から、研究主任がキーワードを選び、そのことをさらに深掘りすることで新たな意見が出てきます。

◇S小学校の校内研究の取組から Sスタンダード

授業の板書計画を提示・共有し、S小学校の基準を示します。このように基準を示し若手もベテランも同じように授業を行うことがSスタンダードです。そうすることで児童の授業に対する安心感にもつながります。授業研究会では、教員一人一人が、学んだことを自分の授業でどのように生かすかを書き、それを共有することで、自分と異なる考え方に気付くことができます。

◇附属小学校の校内研究の取組から 「語りの作法」

「見え」(右図参照)を通して語ることを「語りの作法」と言います。子どもの「見え」を通して授業を語ることで子どもを見る目が育つ、それが大事なことだと考えています。

◇おわりに

校内研究主任のリーダーシップは大切です。まずは研究主任の先生自身が校内研究を楽しむことが、他の先生につながっていくと思いますので、ぜひ楽しんで取り組んでください。

研究会での「語りの作法」

- ・授業者に自分の見えを伝えることは、参観したものの義務である。
- ・授業から学ぶという気持ちをもつ。
- ・事実だけではなく、自分の見えを話すようにする。

見え：その姿の背景にあるその子の思い
その子の思考の流れ
子どもの表れと教師の手立てや環境 など

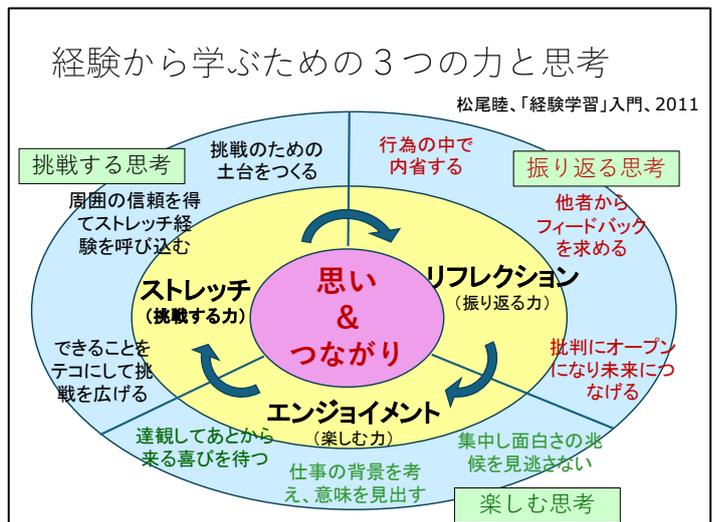
- ・子どもの学びを研究の中心に据え、常に具体的な子どもの姿を語ることから始める。
- 個々の子どもの個々の場面における具体的な頭れをもとに、その教育的意味を検討し合うこと。
- 授業の「技」は単独で存在しているのではない。
- 子どもの表情やその場の雰囲気を読み取って、臨機応変に対応するために「技」を使う。
- ・子どもを共に育てるチームの一員として、授業者へ遠慮なく「指摘」をする。



長年、本プロジェクト研究のトータルアドバイザーとして、御指導いただいています。継続研究の難しさや校内研究主任としての役割、研究のゴールに向けてどのようなことが必要なのかを御指導いただきました。

継続研究におけるプロジェクト研究の組織構造について

今年度は、研究員も含め、本プロジェクト研究への関わりが2年目の方と初めての方、校内研究主任パワーアップ研修を受講されたことがある方とそうでない方、校内研究主任の経験が何度かある方と初めての方と様々なメンバーで構成されています。それまでの成果と課題を積み上げて進んでいく継続研究において、プロジェクト研究を効果的に展開させるために、今年度の組織構造をどのように捉え、どのように研究を進めていくのかということも重要な課題として考えていく必要があります。



校内研究主任の大切な役割として

学び続ける教員・経験から学ぶ教員を育てるためには、「経験から学ぶための3つの力と思考」(前ページ下図)が大切です。校内研究を活性化させるにあたり、この視点に基づいて新任の先生や若手の先生に関わっていく方法を考えることも校内研究主任としての大切な役割です。

研究のゴールに向けて

研究の成果を検証する際、その根拠となる資料が必要であり、「質的な資料」と「量的な資料」の二つをバランスよく組み合わせることで、検証結果に説得力を増すことができます。また、校内研究主任が、教員に対して校内研究の方向性と併せてこれらの資料を提案することで、研究の方向性の理解をより深め、研究成果をよりよく検証することにつながります。本研究においても「授業改善ロードマップ」と『『子どもの学びの姿』見取りシート』の二つのツールを、各実践校において活用しながら、子どもの変容や教員の変容をよりよく捉えられるものとなるように、研究委員の方々と改良を重ねていくことが必要です。

研究委員のみなさんの振り返り

○第2回研究会での学びを振り返って

- ・教員の目指す姿、また、そのための手立てについてはほとんど考えたことがありませんでした。今回の研修で、言葉・文字にすることでより教員の学びが変わっていくのだという実感が湧きました。ロードマップ作成時にいただいた助言を校内に生かそうと思います。
- ・昨年度のプロジェクト研究会を今年度どのようにつなげるか考えることができました。他校の取組や課題を共有することで、自校の研究に結び付けられるヒントを得ました。
- ・先生方から実践例をお聞きしたり、自校で取り組んでいたことを話したりすることで協働的に学ぶことができましたと思います。
- ・生徒にどんな力を付けたいか、今一度教員間で確認し合い、生徒たちにもわかりやすく提示していきたいです。また、教員同士で生徒の姿について話し合い、少しでも授業力がアップしていけるように進めていきたいと思います。

○指導助言をしていただいたことを振り返って

- ・齋藤先生の指導助言では、校内研究活性化の具体的な実践についてお話いただくことで、私自身の目指す教員集団が明確になったように感じました。
- ・辻教授がおっしゃった組織の積み上げによる構造上の難しさは、校内においても当てはまることだと思いました。やはり、教員間の取組や学びは、共通理解しながらステップアップできるようにしていく必要があるのだと感じました。
- ・辻教授の、何をもちょう評価するのかというエビデンスのお話について自校の取組を振り返りました。今までは量的な資料に偏ってしまっていたので、今後は質的な資料も盛り込んで評価をしていきたいと思っています。

プロ研通信第1号 編集後記

プロ研通信第1号では、校内研究活性化プロジェクト研究第1回、第2回研究会の概要についてお届けしました。理論を実践に落とし込んでいただき、校内研究を活性化させていくことは簡単なことではありません。私たち研究員が、実践校の先生方と密に関わらせていただき、皆様に「やってよかった」と思ってもらえるよう、尽力したいと思います。なによりも私たち自身が校内研究に楽しみながら取り組むことを通して、滋賀県の教育をより一層盛り上げていきましょう。どうぞよろしくお祈りします。



研究員
しまうち ゆうしょう
島内 佑祥



研究員
たけうち たつや
竹内 達哉